

平成8年4月17日

豊島区に住む女性自身がまとめた豊島区の 地域女性史

『風の交叉点 ~豊島区女性史通史~』第4集

区役所情報公開コーナー、エポック10、区内書店で発売中

歴史の裏方のさらに裏方に位置づけられてしまった無名の女性たちの声や姿からさまざまな生き様を学び、分かち合うとともに次代にそれらを伝えることを目的として編纂された豊島区の女性史シリーズ『風の交叉点』の第4集がこのほど刊行された。

本書は、昭和63年に策定された豊島区婦人行動計画『としま150プラン』でうたわれている『女性史の編さん事業』として、平成4年に第1集が出版され、今回で第4集目となる。いずれも豊島区の呼びかけに応じた女性史編纂編員が、手塩にかけて編集したものである。

『職業を通して』『まちに生きる』『家族とともに』としてまとめ、自らの意志と自己犠牲のもと、女性蔑視の時代を精一杯生きてきた26人の女性の目を通して、構造的な女性差別の全体像に迫った第1集。

『ハイカラさんと旧家』『働き抜いて』『手をたずさえて』『戦争は二度といや』としてまとめ、大正デモクラシーから第二次世界大戦、戦後の混乱、高度経済成長と社会が激しく変化していく中で生き続けてきた89人の女性の生き様を克明に紹介した第2集。

豊島区という地域に根ざしながら、女性参政権獲得運動、社会事業、女子教育の実践といった、女性解放活動に一生を捧げた14人の女性たちを取り上げた第3集。三巻とも一人一人の女性についての聞き書きを核にして、周辺の地域のこともあわせて紹介し、豊島区という地域に住んだ女性の生活と歴史をいきいきと描いている。

第4集となる本書は、シリーズの完結編として、第1集から第3集までではとりあげきれなかった、明治から現在に至る豊島区の女性たちの歩みを「通史」としてまとめている。

構成は、歴史資料では断片的に記録の残る近代以前を、豊島区女性の原風景として捉え（第1章）、それ以降の女性像を中心に追っている。

第2章は、明治期の後半から大正デモクラシーを経て、昭和10年代の初めまでをまとめ、近代化の波の中で村落的景観の見られた豊島の都市化が進行する中で、さまざまな生活の型が混在し、女性の生活や活動も様変わりを見せる様子を追う。

第3章は、戦争と女性たちと題し、日中戦争から太平洋戦争、そして敗戦後を一区切りとして、女性が戦争へと組み込まれていく過程とその後遺症を追う。

第4章は、現代の豊島区に住む人々に共通の生活状況が生まれてくる戦後のいわゆる高度成長期を中心としながら、家庭内外ともに激しく変化した女性の生活や働く女性の増加とこれからの時代の動向を考察する。

公式の記録では残ることのなかった女性たちの歩みを、豊島区という一地域で生活と歴史を刻んできた女性たちをとらえながら、豊島区が村から町に変わる近代化の中で生きた女性たちの哀歓を日本各地の共通の時代様相として浮かんでくる。

シリーズ名の「風の交叉点」には、女性が市民権を得てそれぞれの生活の場で活躍していく現代にあって、地域の女性史を追うことにより、本書が新しい時代の風となっていくことへの願いがこめられている。

エポック10では、「今日の女性に様々な影響をもたらしたこれらの方々の生き方や活動は、歴史的にも、また女性問題を考えるうえにも重要であり、多くの示唆に富んでいると思われまます。本書が一人でも多くの方にお読みいただければ幸いです」と話している。

区の行政情報公開コーナー（東池袋1-18・区分庁舎A館1階）、エポック10（池袋西口メトロポリタンプラザビル10階）、区内の書店で発売されている。豊島区立男女平等推進センター「エポック10」編。発行ドメス出版。定価は1545円（消費税含む）。なお情報公開コーナー、エポック10では消費税分を除く1500円で販売。

また、4月22日午後6時30分から、本シリーズの完結を記念して、「地域女性史を考える」～豊島女性史「風の交叉点」を編み終えて～と題し、日本女子大学教授中島邦氏と豊島区女性史編纂指導員の長谷幸江氏によるシンポジウムを開催する。会場：エポック10多目的ホール、費用無料、定員80名。

問合せ 豊島区立男女平等推進センター「エポック10」